

## アイヌ民族の歴史と文化

第4回

—(ひと)〈暮らし〉〈ことば〉からさぐる—

## アイヌの口承文芸



遠藤 志保 (えんどう しほ)

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究主査

2015年より北海道博物館勤務。特にアイヌ文学を中心とする調査、研究及び博物館の業務に当たっている。

「文学」と言えば「文字を使った作品」というイメージを抱く方も多いかもかもしれません（実際に英語の literature（文学）の語源は「文字」を意味するラテン語 littera です）。ですが、今は文字だけではなく、口頭によるものも含めて、言葉による作品を「文学」と言います。

アイヌ民族は北海道に和人が入植してくる以前から、口承文芸を語り継いできました。とはいえ、現在では、アイヌの口承文芸を主体的なアイヌ語学習の成果としてではなく、生活のなかで何度も聞いているうちに覚えて語れるようになった人というのはほとんどいないと言っていいでしょう。それは、近代化や高度経済成長期を経て生活スタイルが変化し、ラジオやテレビが普及していくなか、物語などを声だけで語り、聞く機

会が少なくなっていったことが理由のひとつです。

それだけではなく、アイヌ口承文芸にかんしては、日本語を使うことが当たり前という同化の圧力が大きくなるなか、生活でアイヌ語が使われなくなり、特に子どもたちにアイヌ語を伝えることが断念されていったことも大きな理由です。たとえば、平取町で生まれ育った貝澤正さん(1912-1992)の回想や評伝によると、幼い頃に祖父・平村コタンピラさんから聞いたのは和人の「おとぎ話」ばかりだったそうです。コタンピラさんはアイヌ口承文芸の語り手としても名高い人でしたが、膨大に記憶していたであろうアイヌ語の口承文芸は、孫たちに受け継がれることはなかったのです。

いま、アイヌ口承文芸を聞いたり学んだりできるとすれば、アイヌ文化関係のイベントや、「アイヌ語アーカイブ」(公益財団法人アイヌ民族文化財団：写真1)などの口承文芸の資料を所蔵している機関が公開しているウェブサイトなどがあります。

こうしたウェブサイトや本・CDなどのもとなっているものは、これまでの調査や研究などによる記録です。それらは研究者らによる成果として公開されていますが、その調査や研究を支えてきたのは、生活が変わっていく時代を生きていくなかで自分たちが知っていること、教わったことを提供した人たちです。また、自ら筆をとったりレコーダーをまわしたりして、自分たちのことばであるアイヌ語を自分たち自身で記録してきた人たちもいます。

今回は、そうしたアイヌ語・アイヌ口承文芸の歩みを振り返るひとつの手がかりとして、主に昭和30年代以降、アイヌ口承文芸が研究者などによって記録されていくなかで、ひときわ大きな役割を果たした、沙流地方の「伝承者」のひとりである平賀サダさんの功績に触れながら、アイヌ口承文芸について概観します。

## アイヌ口承文芸のジャンル(1)——物語

口承文芸は口頭で伝えられるものですが、「文芸」という言葉から想像されるようなストーリー性があるものだけではなく、歌や呪文など、言語による作品を広く含みます。



写真1 国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ トップ画面

まず、ストーリーを楽しむものとしては、散文説話、神謡、英雄叙事詩の大きく3つのジャンルがあります。いずれも一部の例外はあるものの、物語の全体をとおして「私は〇〇である」「私は〇〇へ行った」のように一人称叙述の形式で語られることが特徴です\*1。

「散文説話」は、アイヌ語では方言によって、ウエペケレ（北海道西南部）、トゥイタケ（旭川・十勝・釧路など）、トゥイタハ（樺太）などと呼ばれます。散文説話という訳語どおり、節を付けずに語る物語で、多くの場合は人間が主人公です。物語は主人公の暮らしぶりから始まり、ある日何らかの事件に巻き込まれますが、主人公自身の才知やカムイ（神）の助けなどでその事件を解決します。その後は子どもにも恵まれて幸せな一生を過ごした、というのが基本的なストーリー展開です。

「神謡」は、アイヌ語ではカムイユカラ（北海道西南部）、オイナ（道東や樺太）、メノコユカラ（沙流川中流域）などと呼ばれます。それぞれのストーリーには固有のメロディがあり、それに乗せて物語は語られます。そして、サケヘ（またはサハ）と呼ばれるくりかえしの言葉をはさむという点が語りの形式における特徴です。多くの場合はカムイが主人公で、カムイ同士の話もあれば、カムイと人間との関わりの中かで事件が起こるといった話もあります。

「英雄叙事詩」は、ユカラ（北海道西南部）、サコロペ（道東）、ハウキ（樺太）などと呼ばれます。神謡と同じようにメロディに乗せて語られますが、ストーリーごとではなく、語り手がそれぞれに自分の節回しを持っています。そして語り手も聞き手もレツニと呼ばれる棒で炉縁を叩いてリズムを取りながら語るという形式が特徴です。主人公は空を飛ぶなどの超人的な力を持った少年英雄で、同じように超人的な力を持った敵たちと戦いを繰り広げるといった物語です。

### アイヌ口承文芸のジャンル(2) — 物語以外

物語だけではなく、歌も口承文芸のひとつです。これは節回しを聞かせることが主な目的です。そのため発声法や節回しなどは技巧性の高いもので、メロディを伴っている神謡や英雄叙事詩における語り方とは異

なるものです。歌には、座り歌、踊りの歌、即興歌、子守歌、杵つきの歌など、いくつかの種類があります\*2。

そのほかに、口承文芸のなかには、数十秒で口でできるような、ごく短いものもあります。

カムイ ヌナキ、トゥイ、トゥイ

(水の)カムイの濁り水よ、切れろ、切れろ

チェッポ ヌナキ、トゥイ、トゥイ

小魚の濁り水よ、切れろ、切れろ

これは平賀サダさんが語った、水を汲みに行ったときに濁り水を澄ますときに唱える呪文です。「濁り水が切れる」とは、ここでは「濁りがなくなる」という意味で、全体としては「濁り水をきれいにしてください。小魚が動いて濁った水もきれいにしてください」という意味です。こうした呪文は日常的に唱える短い言葉であり、シチュエーションに応じて、唱える文句が決まっています。

また、特に決まった場面や目的で語られるわけではなく、口に出して楽しんだり面白がったりするものもあります。たとえば、鳥の聞きなし（鳴き声を意味のある言葉にあてはめたもの）です。メロディに乗せて口にしますが、歌のように節回しや発声は重視されません。次にあげるのはキジバトの聞きなしで、これも平賀サダさんによるものです。

クスウエ ヲイタ キジバトが耕作する

フチ ワッカタ おばあちゃんが水汲みする

カッケマツ スケ 女の人が料理する

ポン トノ イベ 小さい殿様が食事する

ポロ トノ イベ 大きい殿様が食事する

実際のキジバトの鳴き声を（そう言っていると思って）聞くと「フチ ワッカタ、フチ ワッカタ」と鳴いているように聞こえます。そこから言葉のリズムや意味からつなげて、上のような聞きなしができたものだと考えられます。

### 平賀サダさんについて

平賀サダさん（1895頃–1972）（写真2）は、現在の沙流郡日高町福満に生まれ、沙流川下流域で育ちました。子どものころは日本語を知らずに育ったとのことですが、大人になってからは旅芸人一座の一員とし

\*1 これらの3つのジャンルについては、この連載の2021年12月号、2022年2月号、2022年5月号でそれぞれ詳しく紹介する予定です。

\*2 歌などの芸能については、この連載の2022年1月号で詳しく紹介する予定です。

て各地を訪れ、北見・釧路といった道内のほか、本州や樺太で暮らしたこともあったそうです。

そして平賀サダさんは、生まれ育った沙流地方のアイヌ語や伝統文化などに詳しく、多くの研究者や調査に協力しています。そのため、さまざまな文献や記事で平賀サダさん自身のことや語った口承文芸などが紹介されていますが、平賀サダさんの事績をまとめた「平賀サダ書誌」(『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第6号所収)によると、平賀サダさんが研究者などによる調査に協力したのは、1955(昭和30)年頃からです。この頃に行われていた、アイヌ語諸方言の調査のなかで、平賀サダさんの姉である鳩沢ふじのさん(1890頃-1961)にアイヌ語沙流方言の基礎的な単語を尋ねることが計画されていたそうですが、同席していた平賀サダさんも流暢なアイヌ語の話者であることがわかり、やがてこの調査に協力することになりました。

その後、平賀サダさんは、アイヌ語学者の田村すゞ子氏や音楽学者の近藤鏡二郎氏、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏など、様々な分野の研究者の調査に協力し、「伝承者」として知られるようになりました。そうした調査のなかで平賀サダさんは、英雄叙事詩などの物語や歌のほか、呪文や鳥の聞きなしなど、口承文芸の各ジャンルをオールマイティに語っています。さらに、口承文芸を求められて語るばかりではなく、様々な語り手について「あの人のユカラはこういう節(メロディ)だった」と真似してみせたり、道内の様々な場所に暮らした経験からアイヌ語の地域差(方言差)について自身が違いをどのように感じたかなど、自分の経験に即した説明をしたりもしています。



写真2 平賀サダさん(北海道博物館所蔵)

### 英雄叙事詩の校訂・翻訳への協力—平賀サダさんの「協力」の諸側面(1)

平賀サダさんは、アイヌ文学研究者の久保寺逸彦氏の調査にも長く協力していました。そのなかで、自身が口承文芸を語るだけではなく、他の人が語った英雄叙事詩のテキストの校訂・翻訳にも多く協力しています。

久保寺逸彦氏のようなアイヌ語やアイヌ文化についての調査を多く行っていた研究者が、英雄叙事詩の校訂・翻訳のために平賀サダさんの協力を必要としたのは、アイヌ語では口承文芸で使われる言葉づかいが、日常会話におけるそれとは違っていることが関わってきます。英雄叙事詩のようなメロディに乗せて語るジャンル(韻文と言います)には、日常的には使わない語句や言い回しが多く見られます。こうした韻文でのみ使われる表現をアイヌ語ではアトムテイタク(直訳「飾られた言葉」)と言います。さらに、同じ韻文であってもジャンルによってアトムテイタクに違いがあり、使われる語句は違います。たとえば、「～けれども」にあたる接続詞は、神謡では日常会話と同じコロカという語ですが、英雄叙事詩ではアナッキコロカという語が使われます。

こうした日常会話と異なる表現を使う物語を、なにも丸暗記で一言一句覚えているわけではありません。頭の中に「あるジャンルの物語を語るときに必要な常套的な表現」のストックがたくさん蓄えてあり、聞き覚えたストーリーにあわせて、その表現のストックを使って即興で組み合わせ、つむぎあげて語るのです。これはアイヌ口承文芸に限らず、口承文芸においては一般的な特徴です。そして、英雄叙事詩を語れるということは、平賀サダさんも英雄叙事詩で使われる表現をたくさんストックしていたということです。

自身が覚えている口承文芸を語るという形だけではなく、こうした校訂も含めて、平賀サダさんはいろいろな調査に協力することで、彼女が祖父の世代から聞き覚えてストックしていたストーリーや表現を研究者を通じて次代に託したのです。

## 女性が語らないジャンルを語る－平賀サダさんの「協力」の諸側面(2)

アイヌ口承文芸のジャンルのなかには、主に男性が語るものと、主に女性が語るものがあります。男性が語るとされるジャンルのひとつは、先に挙げた英雄叙事詩です。地域によって異なりますが、平賀サダさんが生まれ育った沙流地方では、女性が語る場合は節回しを付けずに語るのだと言われていました。もうひとつが、儀式のときにカムイに対して唱える祈り言葉で、これは伝統的には女性は普通はしない（してはいけない）ものだとされています。

ですが、平賀サダさんは節回しを付けて英雄叙事詩を語っています。さらに、祈り言葉を語ったという記録も残されています。もちろん、平賀サダさん自身も、伝統的には女性が祈り言葉を語らないということを十分に踏まえています。そのうえでなお、祈り言葉を語っているのです。

その理由は、1964年に上川町層雲峡に平賀サダさんが招かれたときのものとして遺されている祈り言葉のなかにヒントがあります。そのなかには、

女性は／かつては／祈り言葉を／しないものだと  
／いう話であります／昔の翁が／残した言葉は  
／こうでした。／「女性の言う言葉は／（男性の  
言葉以上に）はるかに／神様が振り向くことが／  
できるものなのだ。／女性であっても／魂のある  
者ならば／お爺さんの言葉に耳を傾けて／後代に  
／お爺さんの言葉を／子孫達に／教えなさい。」  
／ということが／わたしの祖父の／言い残した言  
葉／でありますので／私が申し上げます。（北  
海道教育庁生涯学習部文化課編、1995『くらしと  
言葉4』：pp. 280-282）

という一節が出てきます。女性は「祈り言葉をしないものだ」と言われるにも関わらず、女性である平賀サダさんが祈り言葉を覚えた理由、そして自ら口にする理由として、「後代に先祖からの言葉を教えるため」と説明しています。直接的には祈り言葉を唱える相手であるカムイに対しての弁明なのですが、平賀サダさんが、多くの調査に協力した理由にもつながる、大事

なことのように思えます。

この祈り言葉が語られた1960年代は、アイヌ自身によるアイヌ語学習会もまだ始まっておらず、若い世代がアイヌ語を学べる場は今よりも限られたものだったでしょう。そのなかで、平賀サダさんは「アイヌ語を語り残すために」という明確な意思のもとで研究者の調査に協力をし、時には伝統的な慣習には反することは承知のうえで、男性が語ると言われている英雄叙事詩や祈り言葉などを口にしたのだらうと読み取れます。

### 和人の「イレンカ」のなかで

上にあげた祈り言葉のなかでは、さらに続けて平賀サダさんが「祖父の言い残した言葉」を後の世代につなげなければと思うに至った背景についても語られています。それは、

タネ	アナクネ	今現在は
トノ	イレンカ	和人の思想
イレンカ	カシ	そのしきたり
アコイカ	サマ	に私達は倣って（同：p.273）

というもので、この後には「和人と同じように暮らしているが、どうにか祈りの言葉を述べることができれば」という内容が続きます。ここで「思想」「しきたり」と訳されているのは共に「イレンカ」という単語で、「掟、意向、考え、申し立て」など様々に訳せます。

こうした「和人のイレンカは強くて逆らえず、アイヌも和人の風習に従って暮らしている」というような、同化の圧力によってアイヌ語が使われなくなっていったという一節は、平賀サダさんだけでなく、彼女と同時代を生きた鍋沢元蔵さん（1886-1967）や二谷国松さん（1888-1960）などが語った祈り言葉にも見られます。

和人の「イレンカ」のために、アイヌ語を知っていても使うことを断念せざるを得なかったなかでも、平賀サダさんのように「アイヌ語を残す」という意思のもと、調査に協力した人、あるいは自らの手で記録した人によって残されたアイヌ語の資料は多くあります。それらはいま、アイヌ語やアイヌ口承文芸を知り、学び、覚えるときの大切な礎になっています。